

## 青年よ哲人となれ

全身これ耳

甲「仏教の中心思想が『無我』であつて、人間社会は無我でなくちゃならぬことはわかつたが、無我ということがわかりさえすればいいのか。」

乙「さ、ここからが問題だ。仏教は哲学であるとともに宗教だ。宇宙はこう、人生は、人間は、と理論づけてゆくことだけでなく、哲学を覚えたり、知つたりすることだけでは、『淋しき甲虫』になることだ。われらになくはならぬことは『哲学する』ということだ。でない、と、仏教は無我だ、無我主義に生きねばならぬと叫びつつ、だれよりもいちばん我が強いというような悲惨がおこる。」

甲「哲学するとは、どういうことだ。」

乙「自分の頭だけで知つてゆくと、必ず知つたことが傲慢のたねになる。昔ギリシャにおいて、ソクラテスおよびその子弟は『汝自身を知れ』を叫び、『無知なる我』と知つていた。けれども、ソフィストの連中は物知りだった。哀れなる物知りだった。そこで、哲学を覚えた人になつてはならない。哲学する人に、すなわち哲人にならねばならない。哲人はけつして頭だけで真理を聞かない。頭も胸も腹も自分の全体をもつて、法を聞く。全身を耳にして真理を求める。」

学んで大愚に至れ

甲「全身これ耳になれとはいいいことを聞いた。」

乙「人間の眼は星を見ることができ。しかし足は大地についている。高い理想を持たねばならぬとともに現実の自己を忘れてはならない。自分の足が大地についていることを忘れて、人の足が地についていることを笑うような滑稽をくり返す。」

甲「何だかぼくがマナイタの上にあげられているような気がする。」

乙「われわれが願求している生活態度は、批判の眼を有するとともに、実践者になりたいことだ。岡山県では現職の警官が支店長を殺した。あのギャング事件を考えなくても、国家の法律によつて、人を治める前に、自分こそ、法の実践者でなければならぬ。警官であるよりさきに法を実践する国民でなければならぬ。人の絵を見て批判することはできる。しかし絵筆を持たせると何にも描けない。そこで真の哲人は、頭だけが進んで、手や足は萎縮して動けないというような不具者になることをいちばん嫌う。われらは知るとともに、実践しようとする。哲学者や物知りであるよりさきに人間でなければならぬ。」

甲「いちいちもつともだ。」

乙「教育家が教えることを知つて習うことを知らない。宗教家が説くことを知つて聞くことを知らないでは、真の教育家でも宗教家でもない。哲人は、終生、先生であるよりも学生でありたいと願う。仏教が、真実の菩薩はつねに仏、法、僧の三宝の前に合掌していることを説くのもそれである。君よ。いよいよ学べ！ 学んで大愚に至れ。」

甲「聞いていると内省せざるを得ない。無我についてもつと聞かしていただきたい。」

乙「無我というのは『我が無い』というような平面的なことではない。無我を体感せねばならないのだ。」

甲「つまり、無我思想を知っただけではだめだと言うのか。」

乙「古来の仏法者はみんなこの無我を体験するために、血みどろな求道精進を続けた。ここが仏教が哲学をつくるのでなくて、哲人を生み出そうとするゆえんだ。哲学であるとともに宗教であるゆえんだ。親鸞聖人にしても九歳から二十九歳まで勉強されたのだから、たいがいなこととはわかつたに違いない。しかるに、全身をもつて聞かれ求められる時に、そこに出てくるものは何であるか。無我になつてくれない自己、法の示すがごとくなつてくれない我、それがますますはつきりしてくる。そうした悲痛な努力を聖道門というのである。人間はだれでも本能的な、動物的なものであるとともに、同時に自己の改造によつて、自己を高めようとする聖道門なのである。聖道門でなければならぬ。しかしその自覚反省の極、生命道の一大転換が行なわれた。それは真如と我との問題だ。」